

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2022

課題番号：16K02723

研究課題名（和文）仮名の成立と展開 日本語表記の融合的研究

研究課題名（英文）The Formation and Development of Kana, Integrated Study of Japanese Writing Systems

研究代表者

長谷川 千秋（Hasegawa, Chiaki）

山梨大学・大学院総合研究部・教授

研究者番号：40362074

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：中古の「かな」における文字としての成立要件を明らかにし、「かな」と漢字の機能差を考察した。上代の「仮名」と中古の「かな」の連続性・非連続性の問題については、9世紀後半～10世紀の仮名資料に基づき、使用字体・字形・機能・用途といった要素ごとに、複線的に連続・非連続を考えるべきことを提起した。仮名の展開期の資料として、東京国立博物館蔵「秋萩帖」、東京国立博物館蔵「神歌抄」の仮名の特徴を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

上代の「仮名」が中古の「かな」に置き換わる理由は未だ解明されていないが、中古の「かな」が文字として成立する要件として、かたちとしての成立、機能としての成立、社会の中での成立、仮名で書くことへの必然性の4点を明らかにし、さらに「かな」の成立と展開において9世紀後半～10世紀の仮名資料を用いたこと、「秋萩帖」の字母選択が「高野切」「綾地切」等と共通することを明らかにしたことに学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：Make clear the requirements for the establishment of characters as "kana" in the Heian period and examine the functional differences between "kana" and kanji. Regarding the issue of continuity and discontinuity between "kana" of the Nara period and "kana" of the Heian period, based on the kana materials from the late 9th century to the 10th century, it was proposed to consider continuity and discontinuity in a multifaceted manner, taking into account elements such as character style, shape, function, and usage. As materials from the developmental period of kana, the characteristics of kana in the "Akihagijo" and "Shinkasyo" preserved at the Tokyo National Museum were clarified.

研究分野：日本語学、日本語史、表記研究

キーワード：かなの成立 上代の仮名 訓点資料 木簡 秋萩帖 神歌抄

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

9世紀後半から10世紀にかけて記された仮名墨書土器、漆紙文書の考古学的発見が近年日本各地で相次いでいる。研究開始後の2017年には山梨県甲州市ケカチ遺跡から和歌刻書土器も発見された。相次ぐ発見により、9世紀後半から10世紀にかけての仮名資料を日本語表記史に位置づけることとともに、上代の「仮名」が中古の「かな」に置き換わる理由を明らかにすること、中古の「かな」がどのように展開していくかを明らかにすることが表記研究において求められるようになってきている。

2. 研究の目的

表記史上の難問である《上代の「仮名」が中古の「かな」に置き換わる理由》を明らかにすることを目標としてその理由の解明に迫ること、《上代の「仮名」が中古の「かな」に置き換わる理由》に迫るために、上代の「仮名(いわゆる真仮名、万葉仮名)」と中古の「かな」の連続性と非連続性について明らかにすること、9世紀後半から10世紀にかけての仮名資料を収集整理し字形・字体等の分析ができるようにすること、これらの仮名資料を用いて「秋萩帖」等の分析を行い「かな」の展開していく過程を明らかにすることを目的としている。

3. 研究の方法

上代の「仮名」が中古の「かな」に置き換わる理由は未だ解明されていないが、9世紀後半から10世紀にかけての仮名資料群は、仮名の成立を上代の仮名と中古の「かな」の連続性と非連続性という観点で考察する際の好資料となる。これらの仮名資料群の影印を収集整理し、字形・字体一覧表を作成し、字体の種類や字形の変遷等を分析できるようにする。さらに、9世紀後半から10世紀にかけての仮名資料群の字体を基準として、平安時代初期訓点資料や他の文献と比較対照することにより、上代の仮名と中古の「かな」の連続性と非連続性や、「かな」の展開期の分析の手立てとする。

4. 研究成果

9世紀後半から10世紀にかけて記された仮名資料に基づき、文字としての仮名の成立要件を考察した。「かな」の成立要件には、「機能としての仮名の成立」、「文字(かたち)としての成立」、「仮名で書くことを必要とする用途がある」、「社会の中で成立する(字体に文字としての視認性があること)」が挙げられこの要件を満たし、意味喚起への回路が断たれた字体のセットが揃い、漢字とは異なる文字体系であることが自覚されることにおいて「かな」が成立したことになる。はの付帯条件である。新しい文字が成立する際、萬葉仮名と通称されるこれまでの文字、真仮名との関係性が全く失われることは、成立間もないという状況ではありえない。ということは真仮名への還元可能性がどこかで担保されなければならない。は、冗長な仮名書きのデメリットが活き、漢字の意味喚起を払拭して日本語を書くことの有効性が見られるということで、の付帯条件である。

9世紀後半から10世紀にかけて記された仮名資料に基づき、仮名成立後の仮名と漢字の機能差を考察した。中古に、文字としての仮名が成立するが、成立後も仮名とともに漢字が使用され続ける。仮名とともに漢字を使うこととはどのようなことであるのか、仮名と漢字の機能差はどこにあるか、という問いは仮名成立において提起されるべきことである。仮名書きに漢字列が、語/句レベルなど、どのように交じるかで分類した結果、句レベルで漢字列が交じる場合は、判断・評価などの微妙なニュアンスを伝達する句を仮名が請け負い、手続きや事態の経過など叙述的な句を漢字が請け負い、伝達内容によって漢字列と仮名列の切り替えが起きていることを明らかにした。

2017年に出土した山梨県甲州市ケカチ遺跡の和歌刻書土器の解読に参加した。土器の仮名字体は10世紀の特徴に一致し、10世紀半ばに制作された甲斐型土器であるという考古学からの結論と合致するものであることを明らかにした。

9世紀後半から10世紀にかけて記された仮名資料を用いて、上代の「仮名」と中古の「かな(女手)」の連続性・非連続性を考察した。木簡の「仮名」の特徴(乾善彦『日本語書記用文体の成立 基盤』第二章第七節173頁)は、「かな」に緩やかに連続しているように見える。しかし、例えば、9~10世紀の資料に頻出する字母「以」「幾」「散」「女」は、木簡には見えず課題を残す。これらの字母は平安初期の訓点資料に使用例があり、初期訓点資料の実態も考慮しつつ「仮

名」から「かな」への字体の非連続が考えられるとよい。仮名/かなの機能面では、漢語の傍訓と文書の場合とを同列に扱えないが、字体・字形レベルにおいては訓点資料を含めて検討することが有効である。つまり、使用字体・字形・機能・用途といった要素ごとに、複線的に仮名/かなの連続・非連続を考えるべきことを提起した。

「秋萩帖」の草仮名が仮名成立期の古態をとどめるかどうか検討するために、9世紀後半から10世紀にかけて記された仮名資料群の字母、10～12世紀の芸術性の高い草仮名資料群の字母とそれぞれ比較した。その結果、草仮名資料における字母選択の幅は個別的で漢字と親和的であり、女手で変字に用いられる希少な字母と共通し、変字法の用途があることが見えてきた。「秋萩帖」と最も字母の一致度が高いのは「高野切」系統の和歌集、次いで「綾地切」であり、「秋萩帖」は「綾地切」とともに「高野切」系統の和歌集と同時期、すなわち11世紀後半以降の書写であると推定した。

東京国立博物館蔵「神歌抄」は外題に「神楽歌信義自筆」とあり醍醐天皇曾孫の源信義筆と伝えられる神楽歌を仮名書きした卷子本で、紙背は唐代の「毛詩並毛詩正義」である。書写年代は、11、12世紀とも、10世紀とも見られており一定しない。10世紀の仮名資料の仮名字母・仮名字形と、「神歌抄」のそれを比較するに、「神歌抄」の「かな」は10世紀半ば頃とされる土左日記の「かな」の特徴に近い特徴を有している。音韻上の特徴としては、上代特殊仮名遣のコ甲乙の区別、ア行のエとヤ行のエの区別がないこと、「措く」にのみオ・ヲの混同が認められた。これらのことから、「神歌抄」は10世紀半ば頃の特徴仮名字体・音韻面で10世紀半ば頃の特徴が認められることを明らかにした。「神歌抄」に特徴的な表記様態の特殊性（真仮名、非連綿の「かな」、連綿の「かな」の3つの様態に分けられる）については、歌の節回しを書き留めるのか、歌意を書き留めるのかの二つの指向が働いたためであると考えられる。非連綿の「かな」は他の資料に見られないものであるが、9、10世紀の連綿体の特徴（文字の最終字画と次の文字の第一画を連綿で繋げるため、連綿は右から左の斜線となるが、これは「かな」一字ごとの独立性が高いことを示している）と同様に、「かな」が真仮名のように音節を書く文字から語を書く文字へと転換する過渡期の現象であることを明らかにした。加えて、契沖の仮名遣に関する著作から近世の真仮名観の一端を明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 長谷川千秋	4. 巻 25
2. 論文標題 仮名遣をめぐる論争－契沖と橘成員	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 37-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川千秋	4. 巻
2. 論文標題 使用字母からみた「秋萩帖」の仮名	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 秋萩帖の総合的研究	6. 最初と最後の頁 81-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川千秋	4. 巻
2. 論文標題 「かな」と真仮名の連続と不連続を考えるために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 万葉仮名と平仮名 その連続・不連続	6. 最初と最後の頁 85-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川千秋	4. 巻 25
2. 論文標題 国語学的にみた刻書土器の文字・表記	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 古代史しんぼじうむ「和歌刻書土器の発見」甲州市文化財調査報告書	6. 最初と最後の頁 18-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 長谷川千秋
2. 発表標題 「かな」の出現と展開 「仮名」との連続・非連続を考えるために
3. 学会等名 科研合同研究集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 長谷川千秋
2. 発表標題 平安期の仮名資料からみた仮名の成立
3. 学会等名 表記研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

山梨大学研究者総覧 http://nerdb-re.yamanashi.ac.jp/Profiles/330/0032926/profile.html
--

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------